

複言語教育におけるフランス語初級文法

—キーとなる4つの要素について—

Grammaire française au niveau débutant dans l'enseignement
d'une seconde langue étrangère

—quatre éléments-clés—

竹本江梨

Eri TAKEMOTO

1. はじめに

本稿では、複言語教育におけるフランス語、具体的には筆者が2007年度から2017年度まで担当した本学の現代国際学部の初学者（主に1年生）を対象にした文法の授業について述べる。

まず、筆者がフランス語初学者、特に入学したばかりの1年生に対し、明確な認識を持たせるよう心掛けていることは「本学におけるフランス語学習は、これまで経験してきた中学・高校での英語学習とは異なる」という点である。異なるがゆえに、同じ捉え方や方法で学習をするのではなく、新しい視点とそれに合った学習方法を取り入れるよう伝えている。

当然、英語とフランス語は二つの異なる言語であるため、学習方法も異なるのは自然の成り行きであることを指摘しつつ、「なぜ学ぶのか？」という目的が異なることをあらためて説明する。中学・高校では、コミュニケーション能力の向上にも目を向けるようになったとはいえ、やはりもっとも重点が置かれているのは受験対策であろう。もちろん、大学でも各種の語学試験対策はできるが、大学の語学学習において最も重要なことは、1)しっかりとした語学の基礎を獲得する、2)それを起点として国際的な視野を持ち、専門分野について学習する、3)そして卒業時には一定の語学運用力とその言語が話

されている国や地域についての基礎知識を獲得していることである、と明確に述べることで、それまでとは異なる学習方法にも大きな違和感やわだかまりなく受け入れていくことができるのではないだろうか。

では授業において、どのような要素に重点を置いて実践しているか、またその理由について学習者の傾向を具体的に示しながら述べていきたい。

2. フランス語初学者において重視すべき4つの要素

2.1. スペルと発音

フランス語の学習においては、まずスペルと発音の一体性を理解し、単語や文をできるだけ正確に発音できるようになることが非常に重要である。「できるだけ正確に」というのはネイティブ並みの発音を目指すという意味ではなく、各母音の発音とその区別、子音、それらの組み合わせによってできる単語、さらに単語の組み合わせによってできる構文を「スペルを見ながら音読でき、無理なく仏語話者に通じる」ような発音を学ぶことを指す。一見、当然のことのようだが、これは決して軽視すべきではなく、むしろ初学時に重点を置いて教授すべき要素である。

2.1.1. 母音の区別

母音の指導では、まず日本語の「ア、イ、ウ、エ、オ」を初めは自然な速さで、次にゆっくりと発音させ、その後「ア」の口の形を保ったまま「オ」を発音するよう指示する。当然、奇妙な音になり、口の形が違っていると「オ」が発音できないことを認識させる。そして、あらためて「ア」と「オ」の口の形の違いを各自に確認させた後、「イ」と「エ」でも同じような作業をさせる。これは今後学習していくフランス語でも母音の発音には口の形（開き具合）や舌の位置など、耳から聞いた音の印象のみならず、具体的に発音器官の使い方を学ぶことで、ある程度正しい発音に近づくことができると理解させるためである。

特に鼻母音の区別にはこの理解と実践が重要である。フランス語の単語集や辞書の中には単語の発音を日本語のカタカナで表記しているものが見受けられ、an, am, en, emの発音である [ã] と in, im, yn, ymなどの発音である [ɛ̃]は

まったく異なる発音であるにもかかわらず、「アン」というカタカナで同一表記になっている場合があり、誤解を与えかねない。しかし、先述のような認識と区別を大学の授業で、特に初期の段階で行っていれば、カタカナ表記をそのまま発音することなく、あくまで参考として見ることができる。

2.1.2. 子音の連続

子音の発音で特に気づくのは、学生が母音のないところに母音を挿入してしまう現象である。基本的に日本語の表記（ひらがな・カタカナ）が音節であり、「子音+母音」の組み合わせであるため、日本語を母語とする外国語学習者が子音の連続の間に母音を挿入してしまうことはよく知られている。それはフランス語学習においても同様で、たとえば *travailler* [tʁavajɛ] の最初の *t* のあとに *o* があるかのような発音をしがちである。そのような場合、まず子音の「音」を確認させる。*travailler* の場合なら、最初の *t* は無声歯茎破裂音であることを示し、母音が介入しないことを説明して練習する。*strict(e)* などの単語は英語と似ており、子音が三つ連続することからも例として提示しやすい。また、日本語を母語とする多くの学習者は「母音のないところに母音を挿入するのは間違いである」という自覚が薄いので、英語の *Disneyland* [dɪzɪnɪlənd] を日本語で「ディズニーランド」と発音する時、最後の「ド」に元の英単語にはない [-*do*] の [*o*] が挿入されていて、英語やフランス語の母語話者に「なぜなのか？」と何度か質問されたことがあること、また日本語の「～です」はローマ字で書くと *desu* となるが、実際には最後の *u* は無声化されて *des* のような発音をしていることから、日本語を学習している外国人に「“です” はローマ字で *desu* と書くのに、なぜに発音する時は *u* の音がないのか？」という質問を受けることなどを例として挙げ、英語やフランス語話者は母音の有無について日本語話者よりも正確に聞き取るため、その認識の必要性、特に子音の連続に注意するよう指示している。

2.1.3. 音から文字へ（聴覚情報から視覚情報へ）

本学では、複言語教育のフランス語の授業に『パラレル』（大岩ほか、2011）¹

という共通テキストを使用している。Introductionでフランス語の発音の概要を示し、1課では名詞の性数および冠詞＋名詞の組み合わせ、2課では英語のbe動詞にあたるêtre動詞の学習といった流れになっている。Introductionおよび1課では文字列や単語のスペルなどを見ながらフランス語の発音練習を導入をするが、2課で初めて動詞の活用が導入され、さらに複雑になる。というのも、アンシェヌマンやリエゾンといった二つの単語を続けて発音する規則や、エリズィオンという「母音の衝突を避けるため、単語同士がスペルも発音も連結して一体化する規則」などを文法とともに本格的に学習し始めるからである。そのため、特に動詞の活用については、2課のêtre動詞、3課のavoir（持つ）、4課の第一群規則動詞、5課の不規則動詞aller（行く）とvenir（来る）まで、これまでとは逆の順序で活用表を暗記する指導をしている。つまり、教科書は伏せたまま、文字を見せずに活用を読んで聞かせ、「聞き取り」でリピート練習をする。何度か練習した後に教科書の活用表で初めてスペルを確認させ、あらためて「スペルを読む」練習をする。

文字を見ないまま、生まれて初めて聞く音（動詞の活用）のリピートを試みるのは多少のゲーム感覚も伴い、学生はそれほど抵抗なく楽しめるようである。そして、音からは想像できない文字列を目の当たりにし、「この発音が、このスペル？」といった新鮮な驚きも記憶に残りやすい良い刺激となる。この練習を習慣づけると、スペルと発音の一致がより定着して認識され、2期が始まる頃には未習の不規則動詞の活用表を初見ですらすら読めるほどになる。また、この方法は1課の男性名詞・女性名詞の区別をするところから適用できる。たとえばun livre（一冊の本、男性名詞）、une maison（一軒の家、女性名詞）のように最初から不定冠詞を付けて名詞の発音練習を積極的に行うことで、「livre→男性名詞→不定冠詞単数にはunをつける→un livre」といった従来の手順を踏まずに、「un livreと発音する→unから始まるので男性名詞」という逆の発想で覚えやすくなるのではないだろうか。

しかし、残念ながら、この方法は万能薬ではない。多くのフランス語初学者は中学・高校の英語が唯一の外国語学習の経験であるため、大学1年時の初期段階ではより細かい指導も必要である。というのは、フランス語の動詞

活用は主語と一体化しており、上述のリピート練習も当然「主語＋動詞」の形で発音練習し、教科書の活用表もすべてそのように表記してあるにもかかわらず、いざ動詞の活用を書く小テストを行うと、主語なしで動詞のみを羅列した不完全な答えを書く学生がほぼ毎年いることも事実である。また、読みに関しては初見の単語を問題なく読めるほど「スペルと発音の一致」が定着しても、その発音を手掛かりにしてスペルの暗記に役立てる、という技術はあまり習得されていないようである。今後はさらにその点を改善し、「音から文字へ」のつながりを具体的に指導していきたいと思う。

2.2. 二人称について（自然なフランス語と日本語の交換）

フランス語には二つの二人称 *tu* と *vous* がある。*tu* は親しい口調を表す単数の二人称であり、それに対して *vous* はより丁寧な口調の単数の二人称である。また *vous* は複数の二人称としても使用され、親しく話す時も、丁寧に話す場合でも、相手が複数なら *vous* を使う。

ここでの重要なポイントは、学生にこの二つの二人称の区別を徹底させなければいけないという点である。中学・高校の英語学習で「*you* = あなた」という固定観念的な理解をしている学生が非常に多い。日本語には「食べる？（親しい口調）」「食べますか？（より丁寧）」といった日常的な区別があり、文化的にその識別に慣れているはずであるにもかかわらず、2課で *être* 動詞を学習する時に「*Tu es étudiant?*」も「*Vous êtes étudiant?*」も「あなたは学生ですか？」と訳してしまう傾向がある。フランスでは *tu* / *vous* の区別は単に丁寧さの度合いのみならず、人間関係の距離感を表現する要素でもあるので、フランス語の運用力という点から見ても、この区別は非常に重要である。

まず、これまでの「*you* = あなた」という考えは一掃し、「*tu* と *vous* は二人称である」という定義を学ぶよう指導する。「二人称」とは、会話なら目の前の話し相手、文字のコミュニケーションならメールや本を読んでいる相手（読み手）を指すのであり、強調しておきたいのは、「*tu* = 君は」「*vous* = あなたは」といった型にはまった日本語訳にとらわれてはいけない、という点である。*tu* は「君」かもしれないが、「お主」かもしれない。*vous* は「あなた」

の場合もあるが、「あなたさま」や「貴殿」かもしれない。要はtuとvousの概念が識別できればよいのであり、「そもそも、日本語に訳す時に必ずしも二人称を訳す必要がない」ことも伝えるべきである。日本語で、目の前にいる相手に「君はこれを食べる？」という奇妙な質問をするだろうか？「これ食べる？」で十分である。これは学生にとって難しいことではない。2課の練習問題にTu es méchant!という文があり、学生が「意地悪だね！／意地悪だな！」といった自然な訳を書いているのを見る限り、その理解には問題がなさそうである。

外国語の運用力とは、できるだけ母語に近い感覚で母語と外国語を置き換えられるか、という交換能力である。本稿では「二人称」を例に取り上げたが、初級の段階から可能な限り自然な日本語とフランス語の交換を心掛けた指導を行うべきである。

2.3. 単語の羅列から構文へ（空間認知の問題）

1課では冠詞、3課ではce, cetteなどの指示形容詞（この／これらの）、4課では所有形容詞、5課では行先や場所を表すà, au, en（～へ／～に）や出発点を表すde（～から）などの前置詞を学習するが、構文が長くなるにつれて、こういった細かな単語を飛ばして文を訳す、あるいは冠詞や前置詞の抜けた作文をする、といった傾向がみられる。つまり、物理的に目につきやすい大きな単語にとらわれ、構文ではなく「大きな単語をつなげた」理解にとどまっている様子がしばしば観察される。時に、学生は「文」ではなく「単語」という単位にとらわれ、「文の意味を考えてくる」ことを「単語の意味を調べ、つなげてくる」作業だと勘違いしているように思われる。また、フランス語は表記上「左から順番に文が構築されていく」言語であり、文を構築しているすべての要素は、たとえそれが一文字の単語であったとしても、必ず「何らかの役割」を担っているのだということが、学生にはほとんど意識されていないように思われる。これは空間認知の問題ではないだろうか。

各課には文法の練習問題があり、その多くは穴埋めや文の一部を書き換えるなどの形式である。それらは学習項目が正しく理解されているかをピンポ

イントで確認するには大変有効であるが、上記の空間認知的な問題を助長している面があるかもしれない。毎週、練習問題は「穴埋め問題でも完成文を書く」という条件で課題として提出させ、フィードバックにも時間をかけているが、「文は左から決まった語順で構築され」、「文を構築するすべての単語に意味／役割があり、注意を払わなければならない」という意識を定着させることが極めて重要である。

なぜなら、誰一人「穴埋め」で話す人間はいない。発話者本人が最初の大文字から最後の«.»まで、自分で文を構築できなければ言語運用能力があるとはいえない。テキスト『パラレル』の文法練習問題には最後に必ず作文問題があるが、レイアウトの関係で2、3問に限られる。また、複言語教育における初級フランス語の授業では学習項目が多く、非常に時間が限られるため、学生に「文の構築を空間的に意識させる」まで構文練習をさせる余裕がないのが現実である。その中で、この目的に沿ったゲーム的な文法練習を一つ紹介したい。

テキストでは2課で形容詞を導入し、夏休み後の2期の7課で特別な変化をする形容詞や形容詞の語順についてさらに詳しく学ぶことになっているが、筆者は2課に7課の項目も取り入れるようにしている。こうしておいた方が、形容詞に触れる機会が増え、2期までに定着しやすいと考えている。それで、3課のavoir（持つ）を学習した時点で、「私は○○な△△を持っている」という文を使ってゲームのような文法練習を行うことにしている。

まず、クラスを4、5人のグループに分け、各グループで文を言う順番を決める。スタートと同時に、一番目の学生が«J'ai ...»(I have...)で始まる文を作り、発音するが、その文には必ず名詞と形容詞の組み合わせを入れなければならない。

例1：J'ai un sac lourd.（私は重い鞆を持っている）

J'ai + 男性名詞につく不定冠詞単数un + 男性名詞sac + 形容詞lourd

すでにこの時点で、学生は正しい不定冠詞を伴った名詞を発音し、形容詞

も付けなければいけないが、フランス語では形容詞にも男性形・女性形があり、名詞の性と一致させなければならない。また、名詞と形容詞が並んだ場合、基本的には形容詞が名詞の後ろに置かれるが、初級単語には名詞の前に置かれる形容詞も多いので、学生は自分の選んだ形容詞が名詞の前に置かれるのか後ろに置かれるのかを正しく選ばなければならない。一番目の学生が文を構築し、発音できたら、次の学生はその文を繰り返し、さらに *et* (*and*) をつけて新しい不定冠詞 + 名詞 + 形容詞 (もしくは形容詞 + 名詞) の組み合わせを付け足す。

例2: *J'ai un sac lourd et une petite montre.* (私は重い鞆と小さい腕時計を持っている)

女性名詞につく不定冠詞単数 *une* + 形容詞 *petite* + 女性名詞 *montre*

そして三番目の学生、四番目の学生と、同様に内容を足していき、一番早く3周したグループが勝ちというゲームである。メモは自由にとってもよいが、グループ内で同じ名詞や形容詞を使ってはいけない。最初は冠詞を飛ばしたり、名詞の性や形容詞の位置を間違えたり、一文を作るのにも苦労しているが、慣れてくるとなかなか独創的な文を作る学生もいる。主語から最後まで自分で文を組み立てて発音するため、フランス語の基本的な構文ルール(文法)を意識させるには非常に有効だと思われる。

こうした「空間認知的な作業」や「各単語の役割と接続を確認」することが、特に中級以降の語学力の上達を促すカギとなるのではないだろうか。

2.4. 何のための語学か

2.4.1. 「意味」を伝える人であれ

« *Colorless green ideas sleep furiously.* » 「無色の緑色の考えは激しく眠る」

これはN. チョムスキーが1957年に発表した著作『文法の構造』において考案した有名な文である。統語的には正しくても意味をなさない場合があるという、文法の独立性を表したものであるが、初級フランス語文法の授業でこ

の文をしばしば引用する。というのは、毎年のように、練習問題や小テストでこの文を思い起こさせる解答を見かけるためである。

先述したように、形容詞は2課で導入するが、小テストに10個ほどのイラストを載せ、そのイラストに合った作文をする、という問題を出している。作文は« C'est ... » (これは～です) もしくは« Ce sont ... » (これらは～です) のどちらかで、各イラストには名詞が添えられ、形容詞は枠の中から自由に選択できるようになっているため、学生は名詞の性数と形容詞を一致させ、イラストに矛盾しない文を作れば正解という問題である。たとえば、車のイラストはごく一般的な特徴のない車であるため、学生の書く答えは *une grand voiture* (大きい車) でも、*une petit voiture* (小さい車) でも、*une nouvelle voiture* (新しい車) でもよい。唯一の条件は、同じ形容詞を2回以上使ってはいけないということである。

しかし、この条件をクリアするためか、最後の問題にこのような犬のイラストを置くと、毎年と言っていいほど次のような解答が見られる。



chien C'est un chien long.

「これは長い犬です」という文である。枠の中には20ほどの形容詞があるが、自分の覚えている簡単な形容詞を他の名詞に使い切ってしまう、バセットハウンドのような胴長の犬のイラストに対し、*long* (長い) という形容詞を用いてしまう学生がいるのである。この時、筆者は上述のチョムスキーの文を例に挙げる。たとえ文法の授業でも、「文法は正しいが、意味をなさない文」を作ってはいけない。そのうえで、学生に「何のために語学を学んでいるのか、もう一度考えてほしい」と話す。本稿の「1. はじめに」に記述したとおり、卒業時に一定の語学運用力、つまりその言語でのコミュニケーション力を獲得することが一つの目的であるなら、文法の辻褄を合わせるために「コミュニケーションのとれない文」を作ってはならないのである。他の例では、規則動詞を学習する4課で、練習問題に « J'étudie l'histoire moderne depuis deux ans. » (私は2年前から近代史を勉強しています) という文があり、提出

された課題を見ると「2年」のdeux ansを「2才」と訳し、「私は2才から近代史を勉強しています」という和訳を書いている学生が、少数ではあるが後を絶たない。

先述の「二人称」の問題にも関わるが、語学を志す者は「意味を伝える人」でなければならない。大学という高等教育機関の中で、常に成績や単位に気を取られがちな学生に、機会あるごとに「何のために語学を学ぶか」を思い出してほしい。筆者はそれが語学の軸であるべきだと考えている。

2.4.2. 雑学から教養へ、複言語教育は世界を覗く窓であれ

昨今、学生の「～離れ」は枚挙にいとまがない。テレビ離れ、映画離れ、雑誌離れ、読書離れ、ブランド離れ（車やファッションなど）…、時代の変化は必然かもしれないが、こういった傾向は学生が何気ないことから「雑学」を得る機会を奪い、「雑学」から好奇心と学習を経て獲得する「教養」からも遠ざけてしまっているのではないだろうか。筆者は限られた授業時間ではあるが、開催中の美術展や、上映中の最新映画もしくはDVDやストリーミングで見られる映像の美しい古い映画や映画スターの話などをできるだけするよう心掛けている。美術展は一般に思われているほど敷居の高いものではなく、美術館側は生まれてから一度も美術館に足を運んだことのないような人にぜひ欲しいと願い、誰にでもわかりやすい解説や楽しめる企画を立てていることなど、ごく気軽な内容ではあるが、美術館に足を踏み入れたことのない学生には未知の情報である。具体性を持たせるために、東京の国立新美術館で行われたピカソのポートレート展の話をよく例に挙げる。ピカソが恋多き男であったこと、作品の多くが恋愛の相手からインスピレーションを受けたものであることをかいつまんで話し、ポートレート展にも女たちの姿が描かれた作品が数多く並んでいたことを説明したうえで、「最終日に作品を見ていたら、女子高生と思われるグループが1枚の絵の前で何か話していて、そのうちの一人が「でもこの女、ピカソに未練たらたらだったんでしょ!？」と言ったんですよ」とエピソードを話す。

この発言を聞いて学生は笑うが、筆者が「私はそれを聞いて、素晴らしい!

と思いました」とコメントすると、驚いた顔になる。「だって、そういう出会いやドラマがなかったら、今その名画は私たちの前にないかもしれない。絵には、なぜそれを描いたかというきっかけや理由が必ずあります。そして、それは必ずしも高尚な理由とは限りません。それを感じたのが素晴らしい」

また、東京都美術館で開催されたポンピドゥーセンター展ではピカソの緑を基調にした絵画にちなんでグリーンカレーが発売され（作品そのものとカレーには全く関係がないが、パッケージにピカソの絵が印刷されている）、愛知県美術館のゴッホとゴーギャン展ではゴッホの玉ねぎの絵にちなんで玉ねぎ風味のスナック（同様）が販売されていたことも話し、美術館はそういうユーモアを持ち合わせた場所であり、話題になっている映画を見に行くようなつもりで美術展に出かけてほしいと呼びかけている。「この話をきっかけに美術館に行ってみたら、それが趣味になった」という学生もおり、そういった好奇心が大学での専門分野の勉強にも生かされてほしいと願っている。映画も同様で、映画館に行くこと、行けない人は本学図書館のMLCに所蔵されているDVDを大いに利用するよう勧めている。

複言語教育は単なる語学にとどまらず、そこから世界を覗き見ることのできる窓であってほしい。窓の外の風景が気に入れば、実際に足を踏み入れる気持ちも湧く。本稿の「1. はじめに」で述べたように、「語学を起点とした国際的な視野を持ち、専門分野について学習する」ためには、雑学的なきっかけから発展する教養が必要である。

3. まとめ

本稿では、フランス語初学者において重視すべき4つの要素について述べた。

1) スペルと発音の学習については、母音の区別／子音の連続／音から文字へ（聴覚情報から視覚情報へ）を取り上げ、2) 主語と動詞の導入では「二人称」について問題にふれた。また、3) 学生の「構文力」の問題として「単語の羅列から構文への移行」を空間認知の問題としてとらえ、4) そもそも何のための語学を学ぶかという疑問に対し、語学を志す者は「意味を伝える者」であることを軸とし、また複言語教育は単なる語学にとどまらず、世界

を覗き見ることのできる窓であるべきだという考えを示した。

以上、いささか散文的ではあるが、複言語教育におけるフランス語の授業の一例としたい。

注

¹ 『パラレル』の改訂版が2018年3月に発行。